



糸

巻頭
インタビュー

井

「ほぼ日刊イトイ新聞」主宰
(株)東京糸井重里事務所代表

里

自分がつながっている
場所でお手伝いする

渡邊 大正大学も、2011年(平成23)の東日本大震災以来、宮城県の南三陸を中心はずっと支援活動が続いています。糸井さんも気仙沼市に事務所をつくって、継続的にいろいろなプロジェクト進めて支援されていますね。そういう支援活動も含めて、東京と地方との関わり方について考えていらっしやることを伺いたいんですが。

糸井 僕の耳には地方創生という言葉は、あんまり聞こえなかったんです。自分がつながっている場所でお手伝いする、ということではなくて、それ以上は手に余りますから。よそのことを考えると、僕は基本的に今は今あまりしないようにしているつもりなんです。

手に余るといえるのは、志は良かったんだけど、なかなか進まずそのままになってしまうことで、場合によってはご迷惑になるわけです。

遠くにおいて、もっとこうすればいいのってワイワイ言う人たちに対しては、どれだけ本気で言ってるのかなと、僕は深いものがありますね。自分もそうなんですけど、両方がともに面白いことになるのであれば、いいと思

悲しさとか、「問題だ」という言い方を前に出さずに地方のことを考える

聞き手 ● 渡邊直樹 本誌編集長 写真 ● 河野利彦

糸井さんは、いち早くインターネットの可能性に着目し、1998年に立ち上げたウェブサイト「ほぼ日刊イトイ新聞」は現在、1カ月に144万人のユーザーを集める超人気メディアに成長した。また、宮城県気仙沼市にも事務所を開設し、継続的にさまざまな支援プロジェクトも進めている。そんな糸井さんに、地方との関わりで心がけていることをなど伺った。

うんです。

徳島県上勝町の
逆転物語との関わり

糸井 僕が最初に地方と関わりを持つきっかけになったのは、徳島県の上勝町なんです。徳島には立木写真館という(写真家の)立木義浩さんの実家で、NHK朝ドラの「なっちゃんの写真館」の舞台となった写真館があるんですが、その娘さんが、『広告批評』の編集者で、結構長い間、僕の担当だったんです。

渡邊 そうなんですか。

糸井 つまり、「なっちゃんの写真館」でいうと、なっちゃんの孫ですね。彼

女が故郷に帰ってからも連絡をくれたりして、写真館の再建をやつてるといふ話は聞いていました。

その立木さんが久しぶりに柑橘類やワカメをお土産に遊びにきてくれた時に「糸井さんにぜひお見せしたい」と見せてくれたのが、上勝町の活動記録映像だったんです。それを見て、へーって思ったんです。

渡邊 お婆ちゃんたちが拾い集めた葉っぱを日本料理の「つまもの」として出荷・販売して成功した「葉っぱビジネス」で有名なところですよ。

糸井 そうです。実際は葉っぱビジネスだけじゃないんですけど、ある種のイメージのランドマークのようになって

ていますよね。その葉っぱビジネス「いろどり」の創始者の横石(知二)さんに会って、お話を伺ってみました。面白いですよ。それがきっかけで、上勝町に僕も行くようになりました。僕は「ほぼ日刊イトイ新聞」というメディアをやっていますから、立木さんから伺ったお話を書くことが一つのコンテンツになるんですね。地方が逆転勝ちする、お婆さんたちが逆転勝ちする、という逆転物語ですから。お婆さんたちが元気で、病気になるかなってる暇がない、というのも楽しかったです。

上勝町にはいつてすぐのトンネルに、タヌキが葉っぱをお札に変えて化かしている絵が描いてあるんですよ。それが